第 6 回筑波技術大学保健科学部アメリカ研修

障害者高等教育研究支援センター [1)]　保健科学部保健学科鍼灸学専攻 2 年 [2)]

天野和彦 [1)]　金堀利洋 [1)]　中村文信 [2)]

要旨：筑波技術大学保健科学部としては第 1 回、筑波技術短期大学視覚部時代からは通算で 6 回目のアメリカ研修を平成 19 年 3 月 7 日から同 15 日までの日程で行った。

研修期間の前半は大学間交流協定締結校のひとつであるニューヨーク州立大学バッファロー校（UB）を訪れた。訪問した学内の障害補償支援センターやニューヨーク州西部生活自立支援センターでは、高等教育機関やニューヨーク州・アメリカ国内における障害者支援や社会自立について理解を深めた。語学研修センターでは実際の授業に参加する機会を得た。

期間の後半は場所をニューヨーク市に移して、参加学生自らの立案により、東洋医学に関するプログラムを提供しているパシフィック・カレッジ・オブ・オリエンタル・メディスン（PCOM）を主たる研修先として訪問した。そこでは、アメリカ国内での東洋医学の現状と今後の展望などについて理解を深めた。

キーワード：海外研修，視覚障害，ニューヨーク州立大学バッファロー校（UB），
パシフィック・カレッジ・オブ・オリエンタル・メディスン（PCOM）

1. 研修概要の報告（天野和彦）

1.1　目的・日程など

〇目的：1　大学間交流協定締結校であるニューヨーク州立大学バッファロー校を中心に訪問し , 米国において視覚障害者をとりまく環境について理解を深める。

2　この訪問および交流を通じて , 参加学生の生活意識の高揚を図る。

3　異文化に触れることで , 国際理解の向上につなげる。

〇研修期間：平成 19 年 3 月 7 日 ~15 日

〇研修先：ニューヨーク州立大学バッファロー校（UB）
ニューヨーク州西部生活自立支援センター（ILP）
パシフィック・カレッジ・オブ・オリエンタル・メディスン , ニューヨークキャンパス（PCOM）

・日程：

3 月 7 日（水）成田空港発
ニューヨーク経由バッファロー着

3 月 8 日（木）UB において研修
午後：ELI（English Language Institute）で授業参加

3 月 9 日（金）UB において研修
午前：CAT（Center for Assistive Technology）および CIRRIE（Center for International Rehabilitation Research Information & Exchange）を訪問
午後：ILP（Independent Living Project, Inc.）を訪問

3 月 10 日（土）Niagara Falls 観光

3 月 11 日（日）バッファロー発ニューヨーク着

3 月 12 日（月）PCOM において研修
キャンパス内の施設見学
PCOM および米国内での東洋医学についての講義

3 月 13 日（火）漢方薬局見学および自由活動
午前：東海岸最大の漢方薬局とその工場見学
午後：自由活動

3 月 14 日（水）ニューヨーク発

3 月 15 日（木）成田空港着

1.2　まとめ

訪問先個別の研修内容については、金堀准教授および参加学生の報告に詳しいので、引率責任者として、ここでは研修全体を総括する。

1.2.1　主な訪問先での研修で得られた成果について

〇バッファローでは、高等教育機関（UB）やニューヨーク州およびアメリカ国内における障害者へのサポート体制について情報収集をすることができた。また、障害補償機器や実際の障害者支援プログラムの一端にふれることもでき、より深い認識を持つことができた。また、UB 学内の ELI では、海外からの留学生に対する英語授業に参加する機会を得たことにより、参加学生自らの英語学習への刺激を受けるとともに、わずかな時間ではあったが留学生との交流を図ることができた。

○ UB 学内の CAT において、金堀准教授が、共同研究で開発した高等数学の数式を PC 上で音読するプログラムを紹介・実演したところ、先方が非常に高い関心を示し相当時間の意見交換をはかるなど、これまでの研修とは異なったアプローチが見られた。今後の研修において、また今後の大学間交流の積極的な活用を図る上でも、新たな一歩であったと考えられる。

○ニューヨークでは、東洋医学に関するプログラムを提供している大学を訪れた。アメリカ国内での東洋医学に対する認識や東西医学の統合、今後の展望など興味深い話を聞くことができた。同大学は学部学生の受け入れだけでなく、大学院も持っているとのことで、今回の参加学生は留学の希望もあり、今後への大きな刺激を受けるとともに有意義で充実した研修となった。

○ニューヨークでは、学生自らがプログラムを企画・立案し、それを引率教員がサポートして遂行する形を取った。参加学生が１名であったことや本人の意識が高かったこともあり、積極的に所属学科の教員や英語教員からのアドバイスを受け、非常にユニークなプログラムを企画してくれた。このプログラムを計画・遂行できたことにより、参加学生にとって、英語学習はもちろん、これからの大学生活への大きな刺激と自信を得ることになったと思われる。

1.2.2　その他の反省や課題など

○事前指導：5 分程度の英語での自己紹介、現地の地理や気候、訪問先の概要、ニューヨークでの研修企画、の 4 点に焦点をおいたレポートを作成させた。それをもとにミーティングを重ね、レポートの内容を濃いものにしていくことで、研修への意識を高めることができたと考えられる。特に、学生参加型プログラムとして、学生自身に任せたニューヨークでの研修企画に関しては、本当に素晴らしいプログラムを計画してくれた。

○英語について：読むことについての不安はそれほどなかった（英検２級）が、聞くことについてはもっと時間をかける必要があった。特に、機内や出入国など不可避な場面設定でのシミュレーションは最低限行っておくべきであろう。

○渡航準備について：参加学生の障害程度にもよるが、長時間の移動である飛行機の座席に関して、トイレの近くにしてもらうことや研修参加者にまとまった座席を指定してもらうなどの手配をあらかじめ行っておく必要があるだろう。

また、今回は研修期間中にサマータイムへの移行があり、そのニュースに気づいていなければ、フライトをミスするなどの可能性もあった。

○旅程および健康管理について：飛行機の遅延など思いがけなく予定を変更せざるを得ないことがあるので、旅程および研修プログラムともに十分に余裕のある計画にする必要がある。実際今回の研修でも、ニューヨーク発バッファロー行きのフライトが大幅に遅れたため、現地到着が午前 1 時を過ぎることになった。また、言葉や習慣などすべてにおいて慣れない場所での活動であることを考慮し、ゆとりのある活動計画をたてることを提案したい。

○危機管理体制について：2001 年に起こった米同時多発テロ以降、やり過ぎとも思える厳重なセキュリティチェックを見るたびに、常にテロの危険が隣にあることを認識させられる。学生をあずかる立場として、安全確保を最優先にしなければならない。今後、米国研修に限らず、大学行事としての海外研修について、どの部局がどういう基準を持って渡航の可否を最終決定するのかというシステムづくりを検討してもよいのではないかと考える。

また万一、現地で不慮の出来事に遭遇したときの連絡ルートや行動マニュアルなどの策定も提案したい。少なくとも、引率責任者に現地と日本で通話可能な携帯電話を持たせておく程度の手段は講じられてもよいのではないかと思われる。

2. 引率教員として（金堀利洋）

2.1　総　括

学生の引率を行なうのは今回が初めてで、緊張した日々を迎えると覚悟していたが、同行者に大変恵まれ思いのほか快適で大変有意義な研修旅行を経験できた。特に中村君の渡米前から渡米直後の不安いっぱいの様子から、次第に力強く成長していき、最後には自ら警官に写真を頼みに行く姿には感動すら覚えた。

また自らの研修旅行として得られたものも大変大きい。日本とは違うアメリカでの「障害」の大きな要因として戦争や薬物が頻繁に挙げられていたのが印象に残っている。戦争はともかく薬物に関しては今の日本の現状からしてそう遠くない現実と思われ考えさせられるものがある。

日本とアメリカでは「平等」というものに関する考え方が徹底的に違うように思われる。アメリカでは「平等」は至極当然の権利であり、また他人の「平等」を実現するのも当然の義務であるかのように支援し、さらにそれを州・国レベルで行なうためにシステムを構築しているように感じられた。やることがダイナミックである。日本では支援のレベルが市民・団体レベルに留まっているものが多く、細やかな配慮がなされていたりするが、ローカルなもので終わってしまっているように思われる。

今回、観光と呼べるものはバッファロー滞在3日目のナイアガラ観光とニューヨーク2日目午後の自由活動であったが、観光と言えども慣れない外国の地では休息とは言えず、実質休みなしの日程であった。内容の濃い研修日程であったが、体調管理や今回実際にあった飛行機の遅れなどを考えるともう少し余裕のある日程であってもよかったのかもしれない。また、今回の研修旅行がこのような成果があげられた要因としては、学生参加型のプログラムを計画したこととそれに応えて自ら研修先を見つけてきた中村君の熱心さによるところが大きかったものと考えられる。

2.2 バッファローにて

バッファロー初日は中村君をUBのELIに一人残し天野准教授と学内の見学を行なった。少々不安も残ったが、後から考えるとここでの経験が後々の見違えるような成長につながったようである。

見学中に「健康フェア」なるものが開催されており、その中でも摂食過多による糖尿病に関する展示が目に付いた。また、健康食として豆腐が紹介されていたが、その中で「いかにして豆腐が入っていることを隠すか」というような料理法が紹介されており、少々疑問を抱いたことを覚えている。

2日目は以下に紹介するUB内の別キャンパスにあるCIRRIEとCAT、そしてILPを訪れた。

2.2.1 CIRRIEとCAT

CIRRIEとCATは共にUB内の部局である。「アメリカと多国間とのリハビリテーション研究・支援に関する情報・技術の共有」をCIRRIEは目的とし活発な活動を行なっている。Stone先生から説明を受けた。特に印象に残っているのはマイノリティへの配慮である。障害だけでなく、非常に多くの国・人種、更には宗教が複雑に絡み合う国内の事情に対して真摯に、そしてそれが当然の事であるとして取り組む姿は同じ支援活動の一端を担うものとしては大変刺激となった。

CATでは主に以下の活動を行なっており、それは我々支援センターの活動と非常に近いものである：

(1) 支援機器・技術の研究開発とその製品化

視覚障害向けだけでなく、その他の障害全般への支援機器・技術の研究開発を行なっており、更に開発された機器の製品化まで強く視野に入れている。自分の経験からも、特にアメリカでは「より多くの人に使ってもらい、そのサポートをするため」に製品化するという考え方は非常に一般的なもののように思われる。実際にATA（The Alliance for Technology Access）という障害者・支援者・研究者・販売者からなる団体が存在し積極的に支援技術・機器の製品化を支援している。

(2) 支援機器の操作指導と情報提供

支援をされる側・支援を行なう側に対しての支援機器の操作や情報・サービスの提供を行なっている。活動の一環として、本学の障害保障教育室にあたると思われる部屋に支援機器が並べられていた。機器としては拡大読書器や点字ディスプレイ・スクリーンリーダはもちろん、特に多いと感じたのは肢体不自由者向けと思われる様々なポインティングデバイスやキーボードで、額にマーカー（シール）を貼り付け、それをWebカメラでトレースすることでマウスの操作を行なうものもあった。このように様々な肢体不自由者向けの機器が用意されているのは、この部門の設立の大きな目的の一つに「負傷兵（退役兵）の支援」があったためではないかと思われる。実際にキャンパス内の研究施設には「veteran」という単語が多く見られた。これもまた日本とは全く違っている点である。

視覚障害者向けの機器に関しては障害保障教育室の方が様々な機器を用意していたが、アメリカにおいてJAWSと並んで使用されているスクリーンリーダ・Window-Eyesを実際に見ることが出来た。

(3) 教育機関・企業のアクセシビリティへの取り組みの評価と指導

日本でも近年はアクセシビリティの重要さが浸透してきてはいるが、その先進国アメリカでは企業が積極的にCATといった機関にアクセシビリティの評価と指導を依頼するというのはほぼ義務化しているようである。また教育機関においても教材の作成などの指導もおこなっているとのことである。さらに支援機器・技術・サービスに関する情報の普及・啓蒙といった多岐にわたる活動を行なっている。

このCATにおいて以前国際会議でお会いしたCATの所長であるLane氏と再会することができた。そこで我々が開発している科学技術文書処理システムInftyの紹介を行なった。このシステムは論文や教科書など数式の入った文書を光学文字読取システム（OCR）を用いて認識し数式部分も含めて読み上げ、更には読み上げだけを用いて数式の入力も行なうことが出来るシステムである。このシステムについて先方は関心を示し、貴重な意見交換を行なうことができた。その際、前述したATAを紹介され、このシステムの製品化を勧められた。ATAは有効な支援技術・機器に対して資金面の援助だけでなく、販売の際にはマーケティングなどの実務も請け負い、その普及を強力にバックアップする団体である。こういったATAに関してだけでも非常に有益な情報であった。しかし、既にこのシステム

は製品化が決定しており、また、援助を受ける代わりに様々な制約が発生するといった面もあり、後日、共同研究者との協議の結果、今回は支援を受けない事になった。

2.2.2　ILP

ILP とは障害者の自立支援を目的として設立された機関である。施設内には様々な障害補償器具が台所・バスルーム・リビング・寝室といった部屋にところせましと展示されており実際に使用してみることができた。ほとんどの器具は日本のものとあまり変わらないように見えたが、薬に関するものが少し多く目に付いたのはやはりアメリカでの薬物依存という問題の大きさが関係しているようであった。実際、今回施設を案内していただいた方の一人も、かつて薬物依存であったとのことだった。このように、この施設ではかつては支援される側であった、ある意味一番相手を理解することの出来る人間として支援する側に立たせ、なおかつ本人の自立をも支援することが出来るという仕組みには感心した。また、製品だけでなく CAT でお会いした富田博士が提唱する「スマートハウス」という費用をかけずに自立した生活を送ることを可能とする工夫を凝らした器具も見ることが出来た。

施設の見学の後、ILP やアメリカでの障害者の状況についての説明を受けた。ILP では車での送迎といった移動支援や金銭的支援・就職のための技能訓練・生活環境の改善・カウンセリングといった心のケアなど非常に多くの支援活動を行なっているが、それらの最終的な目標は障害者の「自立」である。どのような支援を行なっていてもそれは「自立」のためである、という大原則があることを強く主張していた。

面白かったのはネイティブ・アメリカンに対して資金の援助などを行なう際に、政府の人間からだと受け取らないが、同じネイティブ・アメリカンからだと受け取るということがあり、そのためもあり様々な人種のスタッフが働いているという話だった。このようにこの国では人種・マイノリティという問題はどこにでもついてまわる問題のようである。

2.3　ニューヨークシティーにて

バッファローでは主に支援技術やサービスについての研修を行なったが、ニューヨークでは主に鍼灸を始めとする東洋医学の現状について学んだ。ニューヨーク初日と 2 日目の午前は PCOM を訪問しチャイナタウンにある漢方薬の販売店を訪れ、午後はニューヨークの観光を行なった。その際、PCOM で勉強されている日本人の田中知美さんに PCOM の案内やチャイナタウン・ニューヨークの案内をしていただいた。また、アメリカで暮らす日本人の現状を聞くことができ、大変お世話になった。

2.3.1　PCOM とチャイナタウン

PCOM の訪問に関しては、まずその訪問先の決定からアポイントメントまでの一切を中村君に一任した。少々乱暴なように感じたが見事にその重責を果たし、結果として非常に中身の濃い・貴重な取材を行なうことができた。その詳しい内容については中村君の報告をご覧になられたい。

簡単な感想としては、キャンパスといってもニューヨークのビル街の 1 棟に入っていてさほど大きな敷地ではなかったが、様々な年代の学生から感じる熱意は大きなものであった。しかしながら、実際にキャンパスのスタッフ・学生の話を聞いてみるとアメリカにおいて鍼灸を始めとする東洋医学はまだまだごく一部での「流行りもの」・「神秘的なもの」から次第に一般的なものになろうとしている始まりの段階の手前にあるということが伝わってきた。それ故に自らがパイオニアとして担っていこうという気概が熱意として感じられたのかもしれない。

チャイナタウンでは「KAMWO」という漢方薬店を訪れ、地下にある貴重な薬草の倉庫を見ることが出来た。これらの詳細についても後述の中村君の報告をご覧になられたい。

3.　参加学生報告（中村文信）

3.1　はじめに

私が、アメリカ研修に志願した理由は大きく分けて 2 つある。ひとつめは、大学卒業後、漠然とであるが、海外に渡り自分の世界や可能性を広げたいと考えているためであった。留学前に一度、英語圏の生活とは、如何なるものかを少しでも知りたかったのだ。ふたつめは、どうしてもアメリカの鍼灸・視覚障害施設を自分の目で見てみたかったためである。日本にある視覚障害者施設や鍼灸大学はいくつか見学したことがあるので、アメリカと日本の違いについても大変興味があった。ただ、大学からの補助金がでるとはいえ、研修にかかる費用は決して安いものではないので、私の中には、とても大きな葛藤があった。「アメリカにいったら、何かが変わるような気がしているだけじゃないだろうか。」、「研修にかかるお金は、もっと有意義な使い道があるんじゃないだろうか。」、「必ずしも自分の目的が達成されるとは限らない。」など、色々な言葉が私の中で渦巻いていた。自分のお金であれば、自由に使え、誰にも気をつかう必要などないので、さして悩むことはなかったのだが、そのような大金は持っていなかったので、親に頼らざるを得なかった。それが、上手く表現できないが、ひどく後ろめたくて、プレッシャーになっていた。

研修を終えて感じることは、研修それ自体は決して楽なものではなかったが、十分に得るものはあり、とてもよい経験になったということである。特に、日本では決して経験できない、言語的なマイノリティとしての体験、日本とは異なった障害者に対する価値観に触れた体験は、とても貴重なものであった。

3.2　事前活動・準備

私はアメリカ研修のために、大きく分けて3つの事前活動を行った。

まずは、英語である。英語で5分間以上自己紹介できるように作文し、青木先生にもチェックしていただいた。本を買って、英会話の準備もやれるだけのことは行った。

次に、研修先についての調査である。地球の歩き方やインターネットを使って、ニューヨーク・シティ、バッファロー・シティ、UBについて調べた。この作業が一番面白かった。

最後は、ニューヨークでの訪問先を決めることである。私は、ニューヨークで医療施設か鍼灸大学を見学したいと考えていた。そのため、形井先生に相談して、ニューヨークにあるPCOMという鍼灸大学を紹介していただき、アポイントメールを送った。その後、何回かやりとりをした結果、訪問の許可を頂くことができた。しかし、この作業は本当に疲れるものであった。手をつけるのが遅く、ニューヨークと日本の時間が正反対ということもあり、徹夜でメールをつくった日も何日かあった。その他にも、英文で書かれたWebサイトを、とにかく読みまくった。はっきり言って、非常に面倒くさくて、大変でなものであったが、今となっては本当によい勉強になったと思う。

3.3　バッファロー

アメリカ研修の出発当日、私たちは、バスでつくばセンターから羽田空港に向かった。私にとっては生まれて初めての海外旅行だったので、何もかもが新鮮で、少し怖くも感じていた。入国審査では、目の写真をとられた点と、私が白杖を提示すると係の人が、何の躊躇もなく列の順番を早めてくれた点に驚かされた。アメリカのニューアーク空港からバッファローに再度飛行機で移動すると、そこにはマイナス9°Cの世界が待っていた。そしてついに、私のアメリカ研修が本格的に始まったのである。

3.3.1　ELI

バッファローでの研修初日、私たちは、UBにあるCIRRIEの責任者をされているStone先生に、ELIへ案内していただいた。ELIとは、英語圏以外で暮らす学生に英語の授業を提供する施設である。ELIのクラスは5つに分かれており、主にTOEFLの得点UPを目指した授業が行われている。クラスは午後1時から2時半まであり、3時からは、チャットタイムという時間が設けられおり、そこでは、UBの学部生や大学院生と話をすることができる。私が参加したクラスは、難易度的には真ん中のクラスで、13人の学生が参加していた。中国や韓国など、アジア系の方が多いように感じられ、日本人の学生も2名ほど在籍していた。

授業開始前、授業を担当するエミー先生に授業の概略について説明していただいた。その時エミーさんは、話すスピードをセーブし、簡単な単語を選んで会話してくださったので、内容を理解するのにはさほど苦労しなかった。また、授業を始める前に、先生が自己紹介する時間を私に与えてくれた。事前に準備していたので、5分以上は話せる自信があったが、しかし、いざ本番となると緊張して、2、3分しか喋ることができなかった。

クラスが始まると、まず、熟語を使って、文章を作る練習をおこなった。使っている単語や構文自体はそんなに難しくないようだったが、スピードが恐ろしく速くて、授業の内容を追っかけるので精一杯だった。

次に、DVDをみて、その会話の内容を再現するというトレーニングをおこなった。この時間は、ほとんどついて行くことができず、本当に授業を受けるのが苦痛で、泣きたくなった。しかし今思えば、この時の大挫折と劣等感が、「英語をもっとやりたい。」というエネルギーと動機づけに変わっているように感じられる。

最後に私たちは、グループに分かれて、大学生の転学・編入の増加問題について話し合った。中国人の女の子の発音がすごく聞き取りやすかったのが幸いし、ここでは、初めて自分の意見を述べることができた。しょうもないことであるが、本当に嬉しくて、一人で盛り上がっていた。

おそらく、日本人の心の中には、少なくとも私の中には、英語を話せない事に対する特有の劣等感があるだと思う。そのコンプレックスが、「変な英語を話したらどうしよう ...。」という恐怖を生み出し、コミュニケーションに挑戦して、英語能力を上達させるチャンスをつぶしてしまっているのである。よくよく考えれば、日本にきたアメリカ人に我々日本人は、正確な日本語など求めてはいない。ほとんどの人は、ちょっと日本語のできる人よりも、明るくて接しやすい人を好むものだ。「英語に対して、必要以上にコンプレックスをもたない。」、ELIのクラスで私が学んだ最も大切なことである。

3.3.2　CIRRIE

バッファロー2日目の午前中、Stone先生は私たちにCIRRIEについて説明して下さった。CIRRIEとはUBの学

内にある施設のひとつで、大きく分けると、International Research Information、Exchange Program、International Classification of Functioning、Disability and Health（ICF）Utilization、Cultural Competence の 4 つから構成されている。

最初の International Research Information 部門では、アメリカと他国間での、リハビリテーションや障害に関する研究の情報や専門知識の交換、専門職員の派遣や研究者の受け入れなどを行っている。また、情報をデータベース化する仕事も行っており、アメリカ以外の事例も 30000 件以上含まれているとのことである。

2 番目の Exchange Program 部門では、アメリカと他国間での共同活動をサポートする仕事を行っている。その中には、障害者だけでなく、社会的なマイノリティである先住民の子供などに対するケアも含まれているとのことであった。

3 番目の International Classification of Functioning、Disability and Health（ICF）Utilization 部門では、国際的な障害の定義や規定を統一する仕事や、障害に関するワークショップを行っている。

4 番目の Cultural Competence 部門では、それぞれの国、文化によって、どのように障害に対する考え方が異なるのかを調査し、その情報を医療従事者やリハビリテーション提供者に与える仕事を行っている。実際の資料も Stone 先生に見せていただいた。

もう少し事前に CIRRIE の役割や国際的な障害に対する考え方などを頭に入れておけば、もっと深い部分まで学ぶことができたのではないかと思うが、何はともあれ、これもひとつのよい経験になったと思っている。

3.3.3　CAT

CIRRIE の説明を受けた後、私たちは UB 内にある CAT で、様々な障害補償機器を見学した。施設内には、肢体に障害を持つ方のための、「おでこの動きでマウスを動かす機械」、「息でマウスを操作するための装置（吸気で W クリック、呼気でクリック）」、「高さの変わる机」などがあった。

拡大読書機に関しては、日本のものと見た目はほとんど変わらなかったが、黒色と黄色、青色と白色など配色のバリエーションが沢山あった。値段は、30 数万円と日本にあるものとほとんどかわらなった。他にも、キーの大きなキーボードや高齢者の方でも簡単に習得できるように、キー配列を ABC 順に変えてあるキーボードなどがあった。また、点字使用者は、日本と同様少なく、視覚障害者全体の 20% 以下だそうである。主な理由は日本同様、視覚障害の要因の多くが老化によるもので、高齢になって点字を覚えることは容易ではないためだ、との説明を受けた。

また、午後からは、UB で老人学の研究をされている富田先生にもお話を伺う機会があった。現在富田先生は、「スマートハウス」という高齢の方でも、利用しやすい家の研究をされているそうで、カーテンの開け閉めをする機械の話が印象的であった。

3.3.4　ILP

バッファローでの 3 日目、私たちは、ILP を訪問した。最初の 30 分ほどは、施設内にある障害補償器具を見学した。また、ILP にあった補償器具のほとんどは、国立リハビリテーションセンターや盲導犬センターにあるものと同じであったが、個人的には、ライトのついている白杖が最も印象的だった。

事前に補償器具について、もっと詳しく学んでいれば、日本とアメリカの補償器具の違いなどにも気づくことができ、もっと多くのものを得ることができたのではないかと思った。

3.3.5　ナイアガラツアー

バッファロー 3 日目に私たちは、ナイアガラをバスで見学に行った。当日はあいにくの雨だったので、ナイアガラは真っ白でほとんど見ることができなかった。それに加え、英語でのナビゲーションに全くついていくことができなかったこともあり、ナイアガラで、私のフラストレーションは最高点に達していた。天野先生や金堀先生には、本当に迷惑をかけてしまったと思う。今回の研修で一番後悔しているのが、このナイアガラツアーである。

3.4　ニューヨーク・シティ（NYC）

バッファローに 3 日間（移動日を除いて）滞在した後、私たちは、飛行機で NYC に移動した。NYC には 2 日間（移動日を除いて）滞在し、初日は PCOM を見学し、2 日目は PCOM でお世話になった田中さんに、NYC 内を案内していただいた。

3.4.1　PCOM

3.4.1.1　はじめに

PCOM には、日本からあらかじめメールで訪問のアポイントメントはとっていたので、当日は直接大学に伺って、都合のよい時間を訪ねようということになった。訪問前日に、事前に用意していた質問リストの再確認をし、PCOM での自己紹介の練習をしていたのだが、だんだん気持ちが高ぶってきて、正直その晩はよく寝ることができなかった。おそらく、度重なる英語コミュニケーションの挫折により、PCOM での研修に対する期待が不安にかわってしまっていたためであると思う。

訪問当日は、地下鉄を利用して現地に向かった。PCOM に到着すると、受付ではわりと落ち着いて自己紹介と訪問

の目的を伝えることができ、肩の荷が下りた気分になった。話し相手に対して初めて「もうすこし、ゆっくり喋ってもらえませんか。」と伝えることができたのもこの時であった。

はじめの2時間は、職員であるGina LeporeさんとSynthia Neiprisさんに学内を案内していただいた。そしてその後1時間ほど、学生である田中知美さんとお話しさせていただいた。正直に言うと、GinaさんとSynthiaさんのお話の7割は、一方の耳から入って、もう一方の耳からぬけていくような状態であった。だから、日本語を話してくださる田中さんは、私にとって女神のような存在だった。

3.4.1.2　PCOMの概要

PCOMは、東洋医学・鍼灸学を学ぶために1986年にアメリカに設立され、現在では、シカゴ・ニューヨーク・サンディエゴの3つのキャンパスを持っている。鍼灸学と東洋医学の博士、修士、学士課程などをとることができ、私達が訪問したニューヨークキャンパスは、マンハッタンにある21階建てのビルの2・3・5階に位置している。ビルの一角にあると聞いていたので、小さな大学を私は想像していた。しかし、実際に中に入ってみると奥行きがあり、大変広く感じられた。ニューヨーク市は地価が高いため、こういった形式の大学が一般的だそうである。また、セメスター制をとっており、毎年1月・5月・9月の始めの週から授業が始まるそうだ。

3.4.1.3　授　業

少人数制の授業を行っており、教師1名に対して、座学では約20名、実習では15名、専門科目になると4名の生徒がついて学ぶ形式をとっている。漢方に関しては、調合方法から詳しく学ぶことができる。西洋医学系科目に関しても、DNAの構造からガンの発生機序・要因などを学習するなど、かなり専門的な領域まで踏み込むとのことである。一方、東洋医学に関する教科書自体は中国の教科書を翻訳したもので、先生も中国で中医学をマスターしたドクターが多いとのことであった。

また、卒業後独立開業を目指す学生がほとんどであるため、経営理論やビジネス学などの科目もカリキュラムに多く組み込まれている。授業の雰囲気は、学生の平均年齢がだいたい30才と高めであるためか、教授と学生との距離が近く、よい意味で対等に話ができていたように感じられた。

3.4.1.4　施　設

3.4.1.4.1　ON-SITE（大学付属クリニック）

ニューヨークキャンパス内にあるON-SITEは大変大きく、1年生から実習に参加できる。クリニックは、夜も含めて週に6日開かれており、1週間に約500~600名の患者さんが訪れるとのことである。施術室は全て個室になっており、鍼は全てdisposableを使用していた。また、日本製の鍼は他のものより5倍の値段がするのにも関わらず、一番人気があるということであった。

学生の施術時間に関しては、全体で60分と決められており、最初の15分で問診を行い、次の5分で先生と治療方針について話し合う。その後、30分で施術を行い、最後の10分で鍼を抜いて、今後の治療計画について患者さんとの話し合いが持たれる。実際に、施術しているところを見学することはできなかったが、患者さんと施術者である学生がすごくうち解けあい、治療とは第一に、「明るさ」が必要なのだろうなと、つくづく感じた。

クリニックでは、患者さんからの治療担当学生に対する人気不人気があり、そういった競争の中で、技術を向上させ、実践的なスキルを身につけていくそうである。ちなみに、学生は1日に3名まで患者さんをとることが可能で、施術料金は学生が担当する場合は$40で、先生が担当する場合は$60である。また、患者さんの基本情報に関しては電子カルテとして管理しているが、残りのデータはペーパーで保存しているということだった。

3.4.1.4.2　OFF-SITE（学外研修施設）

PCOMは、OFF-SITEという学外研修施設を約20ほど持っている。ニューヨーク市内だけでも、6つのOFF-SITEがあり、エイズセンター、がんセンターや病院などが含まれている。3・4年次になった学生はこういった施設でエクスターン生として学び、様々な経験を積んでいく。私が2日目に田中さんと訪れた「KAMWO」もその一つで、エクスターン生は、週に1回以上OFF-SITEを訪れるとのことである。来院される患者さんも様々で、兵役や服役を終えた後の方、アルコールやドラッグ依存症の方なども多く来られるそうである。また、エイズセンターを訪れる患者さんの多くは、鍼によって、免疫力を高めることを目的としており、学生の中にも数名HIVに感染している方もいるとのことであった。

3.4.1.4.3　漢方薬調合室

PCOMには、部屋の棚いっぱいに薬草や鹿の角などをおいてある部屋があり、学生はここで漢方の調合方法を学ぶ。私は漢方の材料である薬草を見たことがなかったので、とてもよい経験になった。

3.4.1.4.4　その他の施設

図書館には、書籍の他に、経絡経穴を学ぶための人体模型、薬草のモデル、パソコンなどがあり、私が訪問した時にはだいたい30名くらいの学生が勉強していた。また、特に面白かったのが、学内に瞑想室という広い暗室があり、

そこで学生や先生は精神を統一するそうである。日本が西洋医学にもつそれと同様に、アメリカは東洋の医学や文化に対して、一種の憧れのようなものを抱いているのではないかと、その時ふと感じた。

3.4.1.5　キャンパスライフ

PCOMでは、授業料が年間約200万円ほどかかるため、働きながら学校に通う学生がほとんどである。そのため、修士号取得に5、6年かかることも珍しくない。1・2年生の授業では、とにかく覚えることが多く、経済的な要因もあって、ドロップアウトしていく学生も少なくないそうである。実際、田中さんの学年では、入学時は60名いた学生が現在同じクラスに20数名しか残っていないそうだ。田中さんに、「学生生活はどうですか。」と尋ねると、「講義は辛いの一言だけど、エクスターン生として患者さんとふれ合うのが本当に楽しい。」と答えてくれた。

また、NYCは非常に家賃や地価が高いので、友人が数人でひとつの家をシェアする学生が多いようだ。大学近くにはNYCが運営する障害者のための施設もあり、よく視覚障害者が歩行訓練をしている姿を見かけるとのことであった。また、英語能力に自信がない学生は大学の近くに設置されている民間の語学学校に通っているそうだ。

3.4.1.6　アメリカ・NYCの東洋医学・鍼灸

ここでは、SynthiaさんやGinaさん、田中さんに聞かせていただいたアメリカやニューヨークでの鍼灸の話を大きく7つに分けて紹介する。

〇鍼灸師の資格制度について：アメリカには日本のように、全米で統一した鍼灸の国家資格はなく、州によって試験が行われ、州が資格を認定する。つまり、「ニューヨーク州では治療できるけれど、アリゾナ州ではできない」といった事態が起こりうるということである。さらに、資格は終身制ではなく、カルフォルニア州の場合だと、2年に1度の更新と30時間の講習が必要であるとのことだ。

〇鍼灸師の職域について：アメリカには、先生について修行を積み、技術を磨くという概念はなく、ほとんどの学生が卒業後、開業を目指すそうである。しかし現実に治療院を経営していくのは容易ではなく、例えば、PCOMでは卒業後、約50%の学生しか、鍼灸師として生計を立てていくことができないそうだ。要因としては、学費の返済で開業まで手が回らなかったというものが最も多いとのことであった。また、アメリカでは、ヘルスキーパーとして企業に勤務したり、病院内で鍼灸師として働く人はほとんどいないそうである。

〇漢方のとらえ方について：日本で、漢方は医師が処方する薬品の一部として位置づけられているが、アメリカではサプリメント的にとらえられており、鍼灸師でも州が許可すれば、処方が可能である。ニューヨーク州も漢方での治療が認められている。ただしそのためには、大学で300時間以上の漢方の単位を取らなければならない。特に、最近漢方の効力が科学的に証明されるようになり、鍼灸よりも漢方への期待が高まりつつあるとのことだった。

〇鍼灸師の地位について：アメリカでの鍼灸師の社会的身分は非常に高く、医師と同等の社会的評価を受けている。主な理由は、アメリカ人のもつ「鍼は、新しい上に、3000年の歴史がある。」という鍼灸や東洋医学へのイメージによるものと考えられている。また、このイメージが、自然主義的な思想に重なるという点も大きいと言われている。特にニューヨークでは、「ヒーリング」や「気功」などを好む人が多く、「霊気」をコントロールする資格が存在するほどである。ちなみに、この資格は、約30時間の講習で所得可能だそうである。こういった、西洋独特の東洋への憧れを背景に、アメリカで鍼灸は発展したのではないかと私は考えている。

〇患者層について：大きく分けて、3点ほど日本との違いが感じられた。1番目は、ストレスを理由に施術を受けに来る患者さんが大変多いという点である。ニューヨーカーは特にストレスを抱えている人が多く、「睡眠をとって、生活管理をよくすれば、たいていの慢性疾患はよくなりますよ。」と田中さんはおっしゃっていた。また、市としてもストレス対策のために、無料でカウンセリングを受けることができる政策を行っているそうだ。2番目は、難病や急性疾患を抱えた患者さんが多いという点である。この背景には、アメリカの保険制度があると考えられる。特に、ガン治療の分野で鍼・漢方は活躍しており、副作用を抑え、放射線治療や抗ガン剤による治療の補佐的な役割で使われている。3番目は、日本では一般的であるスポーツの現場で鍼灸を使った治療がほとんど行われていないという点である。スポーツ障害を持つ患者さんのほとんどが、医師にかかり、鍼灸師が治療することが全くないというわけではないが、非常に少ないそうである。

〇アメリカの日本鍼に対するイメージについて：アメリカでも、日本流の鍼はマイルドということで有名で、学生にも、患者さんにも人気だそうである。しかし、アメリカの鍼灸師は、日本鍼を、あまり深く刺さない施術方法だと認識しているようであった。

〇訴訟について：私は、以前よりアメリカは訴訟の国だと聞いていたので、鍼灸関係の医療訴訟も非常に多いだろうと予想していた。しかし、実際に訴訟はほとんど起こされておらず、起こされた訴訟も、施術には関係のないもの

で、施術後の金銭上のトラブルなどが原因だとうかがった。

3.4.2　NYC 見学

3.4.2.1　はじめに

NYC2 日目は、PCOM でお世話になった田中さんがご親切に、NYC を案内して下さった。まず午前中には、PCOM の ON-SITE でもあるチャイナタウンの「KAMWO」という漢方店と、漢方を販売しているスーパーを見学した。そして午後には、ウォール街やグラウンド・ゼロ、自由の女神像などをまわった。田中さんは、以前人権保護団体に所属して活動されたこともあり、話をしていて本当に面白かった。

3.4.2.2　「KAMWO」

「KAMWO」は NYC にある東海岸最大級の漢方店である。東海岸の鍼灸師のほとんどは、薬草や漢方、鍼をここから入荷しており、付属の治療院も持っている。店頭では、パルスや日本鍼、茶、亀の甲、人間の胎盤なども売っていた。PCOM の学生も値段が安いため、よくここに薬草や、鍼を買いに来るそうである。

次に、私たちは、田中さんもインターン生として一週間に一回勉強しに来るという「KAMWO」内にある治療院を見学させていただいた。治療院を経営されているのは台湾出身の Dr. Roger Tsao という方で、カルフォルニア州やニューヨーク州をはじめ、5 つの州の鍼灸師免許をもっておられるそうだ。Dr. Roger はもともと、生理学の博士課程を取得するためにアメリカに渡り、その後、リサーチ関係の仕事をされていたが、その時の先生が鍼灸をやっていたので、跡を継いで、鍼灸の勉強を始めたそうである。施術に関しては、舌診と脈診が主で、問診はほとんど行わないとのことであった。「KAMWO」の治療院では、実際の施術を見学することはできなかったが、Dr. Roger に台湾や、台湾の鍼灸について聞くことができ貴重な経験ができた。

最後に私たちは、田中さんも一度しか見学したことがないという地下にある薬草から漢方薬をつくる工場を見学させていただいた。地下室には、見渡す限りの棚にぎっしり、バキュームパッグに保存された薬草が保管されており、その種類は、1400 種類にも上るそうである。私たちが伺った時は、漢方薬を作っていなかったので幸いにも、さほど臭いは気にならなかった。漢方薬を作り出す機械は予想以上に小さく、薬草のほとんどは中国から輸入しているそうである。

3.5　研修まとめ

今回のアメリカ研修で、私は様々な経験をした。特に心に残った点、考えさせられた点をまとめてみる。

まずは、英語圏での生活に関してである。今回の研修で、私は初めて、言語的にマイノリティであることからくる劣等感、言葉が通じない恐怖を経験した。そのせいか、研修のはじめの頃は、まわりの人と積極的にコミュニケーションをとることができず、Stone 先生とも挨拶ぐらいしかできなかった。しかし、研修半ば頃になると、「文法とか発音とかもうどうでもいいや。」と開き直ることができ、Stone 先生とも、ポーリー先生の話題で盛り上がることができた。

また、コミュニケーションにおいて反省すべき点が 2 つほどあった。ひとつめは、話がわからないのにわかったふりをして、頷いたり、愛想笑いをしてしまう癖である。もしも、自分が日本語で海外の方と日本語で話をしていたとしたら、わかったふりというのは、すぐに気づくと思うし、いい気分のするものでもないと思う。ふたつめは、自分の主張をもっと明確に相手に伝える必要があるという点である。アメリカには、日本独特の相手の気持ちを推し量ることを美徳とする文化はそれほど強くなく、そのため、「自分は、視覚障害をもっているから、こういう補助が必要だ。」ということなどを日本以上に、はっきりと主張しなければならないと感じた。さらに、会話の語尾がどんどん小さくなってしまう癖も反省点の一つであった。

とにかく、今回の研修は「英語の挫折研修旅行」と言っても過言でないほど私にとって厳しいものであった。しかしその分、大変大きな動機づけを得ることができ、日本では決してできない体験ができたと考えている。

最後に、視覚障害についてである。私は、アメリカ研修の間ほとんど、白杖を使用していた。視覚障害者であることを明確に表現するためである。日本で白杖を使うことはめったにないので、一概に言うことはできないが、アメリカでは、障害者を助けることが「善行」などではなく、「当たり前」であるように感じられた。また、日本でしばしば感じるマイノリティに対する「異物を見るような視線」がアメリカにはなかったように思えた。特にニューヨークは色々な人種が混在しているため、マジョリティ、マイノリティという概念が希薄なのかもしれない。

今回のアメリカ研修は、はっきり言って私にとって楽なものではなかった。しかしその分得るものも大きく、とてもよい経験になった。是非これからも、この研修旅行を継続的に行っていただきたいと思っている。

文　献

[1] 青木和子，天野和彦他：第 5 回筑波技術短期大学視覚部アメリカ研修．筑波技術短期大学テクノレポート，vol.12：79-84，2005.

Sixth Study Tour to the United States of America by the Faculty of Health Sciences, Tsukuba University of Technology

AMANO Kazuhiko [1], KANAHORI Toshihiro [1] and NAKAMURA Fuminobu [2]

[1] Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired
[2] Student of the Department of Health, the Faculty of Health Sciences

Abstract: A group from the Tsukuba University of Technology visited the State University of New York at Buffalo (UB) and Pacific College of Oriental Medicine, New York Campus (PCOM) from March 7th to March 15th, 2007. This was the sixth such study trip. Two members of the Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired and one student from the Faculty of Health Sciences participated.

At UB, we toured the Center for Assistive Technology (CAT), which conducts research and provides education and services for adaptive devices and the student attended an actual class in the English Language Institute (ELI), which prepares international students for university study. We also visited the Western New York Independent Living Project, Inc.

In New York City, we toured PCOM and it was excellent. Actually, the participating student came up with this plan. The faculty member in charge had delegated the task of making plans to him. He did his best to create a wonderful program. His individual impressions and a report are also included.

Keyword: Study tour, Visually impaired, State University of New York at Buffalo (UB),
Pacific College of Oriental Medicine (PCOM)